

Takeo Takei's book art

ITO Rin

This study is positioned as the second chapter of the doctoral thesis and focuses on Takeo Takei's handmade books "Kanhon". The research aims to categorise the motifs and content in his "Kanhon", elucidate the origins and techniques of his work, discover the characteristics of the characters and poetry, and investigate the mutual influences of his work on the woodblock prints. The results of the research showed that Takei's work can be categorised according to several tendencies. In particular, the motif 'bird' has been re-used in various styles of work. The research in this paper focuses on the mutual influence between Takei and woodblock prints. The results of the research showed that Takei's work can be categorised according to several tendencies. In particular, the motif 'bird' has been re-used in various styles of work. The research in this paper focuses on the mutual influence between Takei and woodblock prints. In conclusion, by researching the origins, techniques, characters, etc. of "Kanhon"'s, Takeo Takei's artistic thinking and process have revealed his unique expression methods and characteristics, and the specialness of "Kanhon"'s in his creative activities has been revealed.

武井武雄における刊本

伊 東 凜 ITO Rin

1. はじめに

武井武雄(1894-1983)は、長野県諏訪郡平野村(現在の岡谷市)に生まれた。尋常小学校、諏訪中学校(現在の高等学校)までを地元で過ごしたが、諏訪中学では、洋画研究を目的とする椰子の実会を結成し、美術の世界に進むきっかけとなった。その後、単身上京し、本郷洋画研究所で岡田三郎助のもとで学んだ後、1914年に東京美術学校(現在の東京芸術大学)に入学した。東京美術学校では、藤島武二、黒田清輝らのもとで西洋画を学び1919年に卒業した後も、研究生として大学に残り、銅版画を学んだ。そのことにより、版画に興味を抱き、後の作品にも大きな影響を与えた。武井は後に、『子供之友』『コドモノクニ』等に子どものための絵を描き、自ら「童画」という言葉を編み出し童画家としての活動を始める。そして、1927(昭和2)年に日本童画協会を結成する。そして、岡本帰一、清水良雄、初山滋、川上四郎、深沢省三、村山知義らと共に、日本童画協会展を開催し、童画というジャンルを確立していった。

武井の創作活動は主に、版画、刊本、童画、子どものための玩具の制作の4分野に分けられ、驚くことに、それぞれの分野で武井は大きな功績をあげている。これらが可能となったのは、武井が作家どうしの交流や、日本童画協会や日本版画協会等の活動に積極的に取り組む中から、相互に影響を受けたためと思われる。

版画は、三つの活動に分かれる。一つは、東京美術学校で学んだ経験を生かした銅版画制作で、1942年の《宇宙説》の制作を最後としている。次に、他の版画作家との交流から生まれた榛の会という年賀状交換会である。これは、1935年から1954年まで20回にわたり続いた。そして三つめは、1944年に

恩地孝四郎の推薦によって日本版画協会に入会して始めた創作版画制作で、武井はこれを亡くなるまで続けた。武井の版画作品の中では、この創作版画が一番有名である。武井がなぜ銅版画制作をやめたのかは不明であるが、時期的なことから、1938年、1939年に、連続して母と息子二人を亡くしたことが原因だと推測できる。

刊本は、139冊の造本であり、毎回違う製法で飽きることない作品を作ろうとしたため、多種多様な技術が用いられている。

童画は、挿絵とタブロー画の二つに分かれる。挿絵に関しては、生涯の仕事として取り組んでいたのに対して、タブロー画は戦後の日本童画協会で作成した作品が主である。

玩具は、こけしとイルフ・トイスの二つに分かれる。大正期に『赤い鳥』や『金の船』といった児童雑誌の発刊を契機として児童文化が発展するも、武井は子供向けの玩具の研究に力を注ぎ、こけしや郷土玩具などの収集に没頭する。一方自ら玩具制作も行った。それがイルフ・トイス(武井が命名した新しいおもちゃの意味)である。しかしこの活動は、2人の息子を亡くした1939年を境にみられなくなる。

武井は死の直前まで創作を続けるが、1983年2月に心筋梗塞で亡くなる。彼の死の10年以上後の、1997年に故郷の岡谷市にイルフ童画館が開館し、武井武雄作品を中心とした資料の収集と展示を行っている。

武井の先行研究の多くは武井の制作した139冊の刊本作品と童画を中心としたものであり、童画家、刊本作家としての印象がいかに強かったかがうかがわれる。本論では、そうした武井の業績のなかで、特に刊本の特徴と意味について、具体的な調査を踏まえて考察したい。本論の構成は以下のようになる。

- 1「刊本とは何か」ではまず、刊本制作の経緯とその特徴を、刊本作家としての武井武雄と豆本友の会、それらの変遷などと共に説明する。
 - 2「刊本の分類」では武井武雄の刊本作品について分類した表を元に、武井の物語における独自性、細かい特徴の分類、またモチーフについて分類する。
 - 3「刊本の技法」では、斎藤正一の『百三十九冊の不思議な本 武井武雄の刊本作品』（文化出版局、1984年）の中で説明されている技法の5分類をもとに具体例と共に考察する。
 - 4「鳥のモチーフが登場する刊本についての分析」では筆者が2022年6月13日に童画館における調査で撮影した刊本作品の画像を元に、武井にとって鳥のモチーフがどのような意味を持つのか考察する。
- おわりに「なぜ武井は刊本を制作したのか」では1～4武井の刊本制作の理由に迫る。

2. 刊本とは何か

2-1. 刊本制作の経緯

刊本とは、私刊本などと呼ばれる作家が独自で作る書物を指している。そして刊本作品とは、武井武雄（1894-1983）により、昭和10年（1935年）から昭和59年（1983年）までに139冊作られた造本芸術である。その特徴は、全ての下絵、物語、印刷形式、版画技法、素材、装丁や装本のデザイン、プロデュースを武井一人で行っている事である。ただ、この武井の完全主義が色濃く反映された作品群は、長期の造本シリーズを作ってやろうという意識を持って生まれたものではない。

この刊本作品を作り始めた1935年は武井にとって一種の転換期であり、版画家だけの年賀状交換会「版交の会」（後の「榛の会」）を作りあげる。また、版画家西田武雄（1894-1961）から譲り受けた銅版画用プレス機を使い、いくつかの銅版画小作品や《地上の祭》¹や《宇宙説》²といった銅版画の代表作も制作する。このように版画制作に積極的に関わって新しい試みを始めていた。上記で挙げた銅版画の中で特に《地上の祭》は、武井の版画制作の極致とも言えるほど、こだわり抜かれた作品であり、アオイ書房の志茂太郎氏と、摺りを担当する版画家関野純一郎（1914-1988）の協力を得て、3年半の年月をかけて作られている。この時の造本制作の経験は武井にとって印象的であるようで、自著やインタビューなどでもその名前が何度か出てくることがある。「本

の美術」という言葉が武井の著書『本とその周辺』（中央公論社、1975年）の中で書かれているが、これは武井が《地上の祭》という作品に取り掛かる上で考えるようになった言葉なのだと推測できる。よって、刊本作品に関する武井のこだわりはこの時の経験から形作られた造本制作の姿勢が受け継がれたものであるとも考えられる。刊本作品第一冊となる《十二支絵本》が生まれたのもこのような転換期が関係している。

その転換期のきっかけは、武井が年次展として日本橋三越で八回ほど開催してきたイルフ・トイス展の打切りである。この展覧会自体は非常に人気があり、毎年相当な数のファンが集まっていた。イルフとは「古い」の逆さまであり、イルフ・トイスは「子供の世界に新しい玩具を」という趣旨の芸術運動であった。しかし、大人のファンばかりが増え、いざ子供の世界に関わるには芸術活動ではなく企業のような形態になってしまうという事で行き詰まり、展覧会毎に一人で大量の玩具のデザインを考える苦労に見合うだけの結果が得られていない現状から展覧会の継続を断念した。この際に三越から「急にやめられるとファンの方から失望されるので、何とかして展覧会は継続してほしい」という希望を受けたのがある種の転機である。イルフ・トイス展を止めてから新宿三越に場所を移し、テーマを毎回変える方向に変更することになった。展覧会「動物の展覧会」を始めるにあたり、その付録品として考えられたのが刊本《十二支絵本》である。

武井武雄本人は初期のものを「私刊豆本」と呼び、1960年のNo.42『Q子の奇跡』を区切りに、それ以降を刊本作品と呼び方を改めている。これは主に刊行形態が「豆本」と言えるほど小さい作品には合わなくなってきたため、制作過程に合わせたためである。

また、毎年1冊だったものが、昭和28年からは、28年が3冊、29年が2冊、30年が3冊と、年3冊のペースに変わり、昭和30～40年代では31年で3冊、32年で1冊、33年で3冊、34年に4冊、35年では4冊、36年では3冊、37年では3冊、38年では1冊、39年で5冊、40年で5冊、41年で5冊、42年で4冊、43年で6冊、44年で5冊、45年で4冊、46年で2冊、47年で5冊、48年で4冊、49年で5冊、50年で4冊と徐々に変化しているのがわかる。

武井が生涯に制作した刊本作品は全てで139冊で

ある。物語自体もユーモアのある独特なものであるが、それ以前に一冊一冊技法を変え、最新の技術や独自の技法を活用するなど、特にこだわりを持って制作していたことがわかる。武井の創作活動において刊本制作は生涯のライフワークであり、芸術活動の枠に収まらない活動であった。このような点から、童画家、版画家としての他に、刊本作家としての一面がよく知られる事となっている。

斎藤正一の『百三十九冊の不思議な本 武井武雄の刊本作品』（文化出版局、1984年）の中では、武井の言葉として次のように述べられている。

（略）美術の中に本という形態で表現するジャンルがない。それを確立するためだ。

（中略）本は読めば足りるという既成概念を一応こわして、見る本というもの現界を無限に広げたいのだ。これが開拓だと心得ている。処女地の開拓には少年らしいファイトがわいて若返り法にもなる。

また、武井武雄の『本とその周辺』（中央公論社、1975年）においては、以下のように述べられている。

（略）版画というものは多数複製出来るという特性をもっているが、決してそれは目的ではない。版でなくては出来ない絵画効果を追求する事の方が目的であって一枚出来ただけでもいい。それが複数出来る事の方はむしろ副作用なのである。本の場合がそれとよく似ていて、本という美術作品を作る場合それは一冊でいいと考えたい。

武井は前者では、本に対する世間の認識を変え、その分野の幅を広げたいという意気込みを述べており、後者では版画家ならではの視点で美術作品としての本についての考え方を述べている。これらから推測されることは、本という形態をとった様々な要素をあわせ持つ美術作品、それが武井の理想的な刊本の在り方だったということではないだろうか。こういった武井の積極的に今までにない物を作っていくとする姿勢は芸術作品に留まらず数多くの創作活動を行う上で様々な影響を及ぼしている。例えば玩具や児童画などの分野では、その挑戦的な志向が発揮されている。上記で説明したように、細かい設計図を自作し、今までにない新しい玩具を作っていくといったイルフ・トイス運動、児童文化が発展し始めた当時、同じように活動をしていた数人の童画家

を集め、率先して童画の芸術的価値を高めるための展覧会を続けた日本童画協会など、それらの多様な活動も武井の積極的な挑戦の姿勢から来るものだと推測できる。これらに関しては次の三章で詳しくで検討したい。

2-2. どの層にどれだけの部数が流通していたか

刊本は、一般には出回っておらず、作者と読者層の間で独自の仕組みが形作られていた。そのため、今でも書籍として希少とされている。現在筆者の手元にある刊本は《神々の旗》、《面倒無用党》の二冊であるが、これらもまた古書店で入手したものであるため、世間一般で流通しているとは言い難いものである。

上記で述べたような独自の仕組みというのは「刊本作品友の会」と言われる。定員300名で人気を博し、定員の空きを待ち続ける「我慢会」、「超我慢会」というものも存在していた。全体で約500～600名に及ぶ会員から成立しており、作者からの配本を会員が直接受け取る形となるため、読者層はそのまま会員の数と一致する。139冊全ての部数の確認を行ったところ、一番多い事例が一作につき300部、次点で500部であった。

斎藤正一の『百三十九冊の不思議な本 武井武雄の刊本作品』（文化出版局、1984年）の中で

（略）普通は三百だが、我慢会にまで特頒する時は五百作る。正会員三百の外に待機して並んでいる人が二百二十位いるわけだ。

と記載されていることから、ある程度部数にも法則性を作っていたと考えられる。具体的な例として刊本作品毎の部数を一部上げてみると、《悪魔の旗 (No.70)》500部、《湖の人 (No.71)》300部、《KAGEYA (No.72)》300部、《鳩と奇術師 (No.73)》300部、《笛を吹く城 (No.74)》300部、《けちな神様 (No.75)》300部、《あるく JACK (No.76)》と確かに頻度は多く感じる。実際刊本作品139冊の内101冊が300部の作品である。なお、500～600部の刊本は大体3～5回に1回くらいの頻度で出ており、定期的に我慢会も楽しめる仕組みができていた。また、最初の500部である《悪魔の旗 (No.70)》以前は我慢会のメンバーもそこまでいなかったのか300部を超えるものとしては400～470部となっている。これらの全容については著者が実際に岡谷市のイルフ童画館で調査した結果を【表1】にまとめたので参照願いたい。

3. 刊本の分類

3-1. 刊本に共通する性質

まず、武井の独創的な発想におけるいくつかの特徴が見られる。斎藤正一の『百三十九冊の不思議な本 武井武雄の刊本作品』（文化出版局、1984年）の中では以下のように記載されており、それらが武井の世界観において土台になっているものだと考えられる。

（略）ファンタジー、メルヘン、ロマンは刊本作品全体に色を変えにおいを変えて一貫して流れている潮流である。

（中略）

武井の人となりの第二領域はエスプリ、ユーモア、ナンセンスである。これらの語句は微妙なニュアンスのちがいを持つが、いまエスプリにはエスプリヌーボーという使い方から、精神、気質、そして機知の意とし、ユーモアは語源の体液の意を重視のうえ、おかし味、しゃれの意とし、ナンセンスは荒唐無稽な、非論理的な、馬鹿げたことの意として、一応この三語をこのくらいの違いとしておく。

これらを武井武雄の刊本作品に共通する土台とした上で、刊本作品のテーマにおいていくつかの特徴から分類をする。

以下の表【表1】は、同じく実地調査に基づいて筆者が独自に作成したものであり、No.、タイトル、ジャンル、テーマ（内容）、形式、技法、年代の7つの分類から構成されている。この研究で最も焦点を当てたのがテーマ、または技法である。刊本作品においては全ての文面を把握し、それに合った概要を説明している。また、技法は作品ごとに試みが違っているため、多種多様なものになっている。

3-2. テーマにおける7つの分類

テーマは大きく7種に分けられる。「ユーモア・エスプリ」「社会・反骨精神・アイロニー」「人物・人生批評」「童話」「詩・抽象的」「武井自身の関係」「昔話や伝説」である。ただしそれぞれの内容が分類上の要素しか持ち合わせていないというわけではなく、それぞれの刊本にはこういった傾向が強いというように分けられる。これらの内容は『武井武雄刊本作品の世界』（古河文学館、2004年）に書かれている刊本作品の文章を元にまとめられている。なお、空白の部分は絵だけで文字が存在せず、特殊な分類にもあてはまらなかったものである。

ユーモア・エスプリ

これらは滑稽さや笑い、軽快さというポジティブなイメージが前提に存在し、言葉遊びや独特の言い回しが特徴的となっている。初期の画本文形式³はこのテーマに当てはまることが多い。

ここでの具体的な例として《善悪読本 (No.4)》、《畑の豆本 (No.6)》等があげられる。《善悪読本 (No.4)》は、仰々しいタイトルだが、身近なものの善悪を屁理屈でこじつけていく言葉遊びのような内容になっており、「スリが苗字でリッパが名前、善いも悪いも薄紙ひとえ」というスリッパを例えた文章で終わっている。《畑の豆本 (No.6)》では、野菜を擬人化して挿絵で表現し、歴史上の偉人について語る文章を対比させることによって構成されている。胡瓜がキュリー夫人に対比されたり、茄子が那須与一と関連付けられたりするなど、単純な駄洒落やユーモアが随所に散りばめられている。これらの例のように、日常の素材や誰もが知っているような題材をユーモラスな要素と組み合わせるという特徴がある。また、このジャンルはその幅広さから、様々なスタイルの作品を包括するため、物語の内容は多岐にわたる。

社会・反骨精神・アイロニー

このテーマは、広義に解釈すると「ユーモア・エスプリ」と同系統の分類になるが、前提となるイメージが社会風刺・皮肉といったネガティブなイメージからなるものであり、より社会的問題を組み込んだ分類となっている。

具体的には、《燈 (No.11)》、《現代の神々 (No.90)》、《赫夜姫後日譚 (No.134)》の三つを例に挙げる。《燈 (No.11)》では、切子燈籠から提灯、灯台、点灯夫、電灯、ネオンと時代の移り変わりと共に変化していく灯りを中心とした内容であり、社会の変化を表す物語の構成となっていた。「現代の神々 (No.90)」は、神々が増えすぎた人間の自滅を待つというコンセプトで始まるが、公害の影響で神々が次々と倒れるというストーリーが展開されていく。公害と環境問題は武井の作品で幾度か取り上げられる題材であり、童画でもそのような例が見ることができる。例えば、《現代の神々 (No.90)》が製作された2年前、1970年では【図1】の《驚くべき人間》という童画が製作されている。この絵の場合、その中で片手にミサイルを持ち、頭上に工場が生えた異形の犬男が戦争と公害をもたらし、半身が獣に変わっている様子が描かれている。社会問題を作品に取り入れること

は、武井の作品において頻繁に行われたアプローチの一つだった。《赫夜姫後日譚 (No.134)》では、輝夜姫が月から地上に戻って来ると、光化学スモッグで空気が汚れていたり、輝夜姫が女性警官になってみたり、公害や女性の社会進出といった当時の時代背景を取り入れた内容になっている。



【図1】《驚くべき人間》1970

人物・人生批評

中心となる人物がおり、その行動を軸として話が進んでいく。時間もその人物を中心に流れていくもので、社会的な要素が入る事はあるが、人生に付属する物として書かれているのが特徴的である。

例として《七重と八重 (No.43)》、《宇宙裁縫師 (No.48)》、《鬘蘭の鯉 (No.116)》を挙げる。《七重と八重 (No.43)》では、二人の姉妹を中心とし、それぞれの性格や人生を対照的かつ、どういう人物なのか他の分類よりも複雑に描写している。人物同士の対比は《モスクワの月夜 (No.78)》や《Rom と Ram (No.97)》でも行われており、武井がよく使う表現である。《宇宙裁縫師 (No.48)》は不思議な裁縫師の男が宇宙や花畑を綺麗に模様替えて、月や火星に行く空路の清掃等、目に見えない仕事をやっていたという内容になっている。このように架空の役割や技術、職業を持つ人間が登場する話は多く、童画で培った想像力を発揮している。《鬘蘭の鯉 (No.116)》は鬘蘭という少女と鯉を中心に話が進み、話のオチで鯉が男に変身して、最終的に皇帝皇妃になるといった終わり方になっている。こういった人間以外と人間の恋愛譚のような話は、《牡丹妖記 (No.15)》、《天竺の花 (No.23)》、《湖の人 (No.71)》などでも見られ、「人物・人生批評」の中の一つのパターンとして組み込まれている。

童話

この分類は主に諷刺やしゃれといった遊びが入る余地がないシンプルな物語として構成されており、

武井の独創的な世界観が発揮されている。

これには《もりどんの話 (No.19)》、《いそなげき (No.136)》等が該当する。《もりどんの話 (No.19)》では、もりどん (雨漏りの意) という架空の生き物の話を聞いた狼が慌てふためき逃げていき、そこに飛び乗った猿が、狼の背の上と気付いてとびおる。その後猟師に追われ、尻尾を引っこ抜かれる。それが日本の猿の尻尾が無い理由だという話になっている。この作品ではおばあさん、狼、猿、猟師という順番でそれぞれ視点が変わる構成になっている。《いそなげき (No.136)》では人魚に出会った海女が人魚に惹きつけられいつしか帰って来なかったという話の内容である。これらの内容はいずれも、動物の特徴の起源に関するもの、人魚伝説になぞらえたものという一般的な童話と類似する特徴を持っている。言葉遊び等が話の中に入っているわけでもなく、社会風刺の話というわけでもない、そして人間を中心にしている話と言うより軸は無く全体的な印象を感じる。武井の刊本作品にしては珍しいタイプの内容になっている。

詩・抽象的

具体的な例として《木魂の伝記 (No.31)》、《極秘亭探訪 (No.32)》、《六つの窓 (No.69)》等があげられる。《木魂の伝記 (No.31)》では、話の流れから物語の連続性は感じられるが、軸となるモチーフが木魂という形を持たないものになっているため、抽象的かつ詩的な文章になっている。また、《極秘亭探訪 (No.32)》等では、男が不思議な屋敷の中に入っていくという内容だが、荒唐無稽で幻想的な単語を用いる詩文らしい文章で、独自の世界観そのものに重点が置かれている。《六つの窓 (No.69)》の場合は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、第六感という人体の感覚がモチーフにされており、短い詩文の身で構成されている。

武井自身の関係

具体的な例として《童語帳 (No.5)》、《KOKESHI (No.12)》、《ラムラム王 (No.55)》等があげられる。《童語帳 (No.5)》は、武井の亡くなった息子たちの供養のために作られたものである。《KOKESHI (No.12)》では、蒐集家でもあった武井が集めたこけしの特徴を全て刊本内にまとめたもので、《ラムラム王 (No.55)》などは、過去の作品のリメイクであり、個々の制作に武井の私生活、個人的な目的が関わったものになっている。

昔話や伝説

具体的な例として《のえる之書 (No.16)》、《どん・きほうて (No.99)》等があげられる。《のえる之書 (No.16)》は、聖書の一節をそのまま使用したもの、《どん・きほうて (No.99)》では物語をそのまま使っている。このように多少の差はあれ独自色が薄い作品であり、数も少ない。

3-3. 登場人物・モチーフ

モチーフの分類として、動物・鳥、もの、人間、擬人化(自然)、人間、既存の伝承等の人物、鬼・妖怪、神、(空想・神秘・感覚)の9つで分けている。これらの分類は主に物語や詩文の中心となる形のあるものを中心としているため、2-1における「詩・抽象的」の中でよく見られる不明瞭で形を持たないイメージの多くは、擬人化(自然)、(空想・神秘・感覚)に対応させている。また、刊本作品の内容における人間、鬼・妖怪、神の三つに大した違いはないが、立ち位置や役割がそれぞれ違っているように感じられた。日常や社会の中に位置づけられる人間に対し、非日常や人間とは別のルールの下に行動するのが鬼・妖怪、社会や環境を管理する上位の存在として位置付けられているのが神、特に神のモチーフは環境問題や社会問題に関わる内容の時に多く見られる。既存の伝承等の人物の場合、内容がそのままになる場合と名前を借りてキャラクターとして出している場合があるが、武井の場合は基本的に後者である。

以上が内容面から見た刊本の特徴と分類である。次に、技法の面から検討しておきたい。

4. 刊本の技法

4-1. 武井武雄の版画技法

武井武雄の刊本において特に特徴的なものはその版画技法である。武井は制作過程を表現様式と称し、139冊ごとにそれぞれ違う技法を使用した。そのため刊本作品においては幅広い作品が見られる。

武井本人の著書である『本とその周辺』(中央公論社、1975年)においては、

(略)とかく同じ事の繰返しというものはいい加減退屈なものだ。

(中略)多くはあまたかといった具合に繰返し蒸し返しの形になって、マンネリズムという現象が

ここに起ってくる。ところが表現様式を変えてみるとその底に流れている作者の個性というものは不変だが、感覚的にはいくらか新鮮になってそこにバラエティーというものが感じられる。

(中略)経験のない新しい形式と取組むとき、処女地に始めて鋳を入れようとするとき、そこには喻えようもない少年らしい希望と闘志とが湧いてくる。

(中略)新しい感覚の発見と創造というのが、つまり目指す彼岸という事になる。

という記載がある。これらの文章からは、長期の制作活動における武井なりのノウハウと、彼の好奇心とチャレンジ精神、こだわりの強さがうかがえる。この姿勢と制作工程は彼自身の几帳面な性格から反映されたものでもあり、今後の他媒体での制作活動にも影響を与えている。

表現様式と言われる製版の技法として、凸版(一色)、凸版(手彩)、凸版(二色)、自刻木版、スクラッチ版、合羽版、石版、アップリケ原色版、伝承木版、活版・木版、木版水拓、糊染、木口木版、vari-type、レリーフ拓本、条版、陶版、層版紙拓、瓦版、友禅染、woven lavel、ペンデュラム・グラビア、エッチング、寄せ木、セロスライド、鑿孔版、tandem print、原色版、蝕彩金工、コロタイプ、特殊網写真版、グランド孔版、カラーグラビア、strow mosaic、ドライポイント電鑄、彫紙、絵入り物語本、石膏版、アルミ詩集、木版乾拓、伝承西洋木版、アップリケ等、これらは一部の例であるが、多種多様な技法による制作が試みられていることがわかる。また、この例の中で半数ほどの制作技法は武井の造語であるため、ほとんどが耳慣れない単語となっている。表現様式全体においてよく使われる例外的な技法として凸版印刷と自刻木版画可憐判の二つが挙げられる。

4-2. 刊本作品の技法の特徴

斎藤正一の『百三十九冊の不思議な本 武井武雄の刊本作品』(文化出版局、1984年)によれば、

(略)それ[分類]は印刷表現の本では版をどのようにして作ったかによって分け、印刷方式は一応問わぬことにした。やってみた結果は雑多な種類が一応系統立てられた

(中略)主義的製版とは作者自身、あるいは彫師などの人間の手技が主となる製版の意味である。

【表1】

No.	タイトル	ストーリーの分類	内容	部数	表現様式	年代	登場人物の分類
1	十二支絵本	ユーモア・エスプリ	干支	0 部数	200	一色凸版	1935 動物・鳥
2	雑祭絵本	武井自身の関係	雑祭	絵のみ	150	凸版手彩	1936 もの
3	諸国絵馬集		絵馬	絵のみ	200	二色凸版	1937 動物・鳥
4	善悪話本	ユーモア・エスプリ	善悪	画文本	200	二色凸版	1938 もの
5	童語帳	武井自身の関係	子どもの発想	画文本	300	自刻木版	1939 人間
6	畑の豆本	ユーモア・エスプリ	野菜	画文本	300	スクラッチ版	1940 擬人化(自然)
7	本朝昔話	昔話や伝説	昔話	絵のみ	300	合羽版	1941 既存の伝承等の人物
8	十二時之書	詩・抽象的	時間	画文本	300	石版	1942 もの
9	伊曾保の絵本	社会・反骨精神・アイロニー	米英と童話	画文本	300	アププリケ原色版	1943 動物・鳥
10	風村三代記	人物・人生批評	一族三代	物語	300	伝承木版	1944 人間
11	燈	社会・反骨精神・アイロニー	灯台	画文本	300	自刻木版	1945 もの
12	KOKESHI	武井自身の関係	こけし	絵のみ	300	伝承木版	1946 もの
13	僕の歌留多	ユーモア・エスプリ	トランプ	画文本	300	自刻木版	1946 人間(トランプ)
14	お猫様	武井自身の関係	不思議な体験	物語	300	活版・木版	1947 人間
15	牡丹妖記	人物・人生批評	牡丹の精との恋愛	物語	300	木版水拓	1948 人間
16	のえる之書	昔話や伝説	救世主の誕生	物語	300	糊染	1949 既存の伝承等の人物
17	乞食の本	ユーモア・エスプリ	乞食の村	画文本	260	自刻木版	1950 人間
18	聖AGNES之書	昔話や伝説	聖アグネス	物語	260	木口木版	1951 既存の伝承等の人物
19	もりどんの話	童話	雪の降る晩の話	物語	260	自刻木版	1951 動物・鳥
20	あいそぼすふあぶら	昔話や伝説	インツプ寓話	画文本	260	vari-type木版	1952 動物・鳥
21	菊妖記	人物・人生批評	菊の不思議な話	物語	260	レリーフ拓摺	1953 人間
22	秒間の符	詩・抽象的	昨日と今日と明日	詩	260	条版	1953 (空想・神秘・感覚)
23	天竺の花	人物・人生批評	インドの奇風の生涯	物語	300	陶版	1953 動物・鳥
24	ARIA		音楽	絵のみ	300	層版紙拓	1954 (空想・神秘・感覚)
25	折鶴物語	人物・人生批評	中納言と鶴	物語	300	瓦版	1955 人間
26	胡蝶散策	詩・抽象的	胡蝶の夢	物語	300	三色凸版	1955 擬人化(自然)
27	姫の尺牘	人物・人生批評	一寸姫	物語	300	友禅染	1955 人間
28	霊長異聞		動物	絵のみ	300	Woven Lavel	1956 動物・鳥
29	第五の世界	詩・抽象的	見えない世界	詩	300	ベンジュラム・グラビア	1956 (空想・神秘・感覚)
30	誕生譜	昔話や伝説	変な誕生をした者達	詩	300	エッチング	1957 既存の伝承等の人物
31	木魂の伝記	詩・抽象的	木魂	物語	300	寄せ木	1957 擬人化(自然)
32	極秘亭探訪	詩・抽象的	不思議な建物	物語	300	セロスライド	1958 (空想・神秘・感覚)
33	六之助行状	人物・人生批評	ある善人の生涯	物語	300	鏤孔版	1958 人間
34	雪の讃頌	詩・抽象的	ふたりの恋人	物語	300	Tandem print	1958 人間
35	近くの世界		ファンタジー	絵のみ	300	原色版	1958 (空想・神秘・感覚)
36	太陽と孔雀	詩・抽象的	太陽と植物と子供	詩	300	蝕彩金工	1959 擬人化(自然)
37	えてんの異変	ユーモア・エスプリ	アダムとイブ	物語	300	コロタイプ	1959 既存の伝承等の人物
38	Sphere	詩・抽象的	球体	詩	300	特殊網写真版	1959 (空想・神秘・感覚)
39	かなりやABC		鳥と英単語	絵のみ	300	グランド孔版	1959 動物・鳥
40	おばけ退場	社会・反骨精神・アイロニー	現代のお化け達	物語	400	カラグラビア	1959 鬼・妖怪
41	ストロ王	人物・人生批評	旅に出る王様	物語	300	Straw mosaic	1960 人間
42	Q子の奇跡	人物・人生批評	錬金術師の研究	物語	300	ドライポイント電鍍	1960 人間
43	七重と八重	人物・人生批評	二人の姉妹の生涯	物語	300	彫紙	1960 人間
44	四十四番館	人物・人生批評	石好き老婆の館	物語	430	絵入り物語本	1960 人間
45	林檎と人間	詩・抽象的	人間に化けた林檎	物語	300	石膏版	1961 擬人化(自然)
46	神々の旗	詩・抽象的	見えない小さな旗	詩	430	アルミ詩集	1961 神
47	運の悪い男	人物・人生批評	詩が得意な男	物語	300	木版乾拓	1961 人間
48	宇宙裁縫師	人物・人生批評	見えない世界の職人	物語	300	伝承西洋木版	1961 人間
49	HAREM	人物・人生批評	王と乞食と1人の男	物語	300	アププリケ	1961 人間
50	独楽が来た	社会・反骨精神・アイロニー	止まらない巨大独楽	物語	430	伝承木版	1962 もの
51	天国と地獄	詩・抽象的	催眠術師の男	物語	300	自刻木版可憐判	1963 人間
52	卵から卵	0	卵から生まれ卵へ	絵のみ	300	木綿型染	1963 動物・鳥
53	鬼の郷衛門	社会・反骨精神・アイロニー	人間になりたい鬼	物語	300	Wonder View	1963 鬼・妖怪
54	紫の眼鏡	社会・反骨精神・アイロニー	不思議な眼鏡	物語	430	自刻木版可憐判	1963 動物・鳥
55	ラムラム王	武井自身の関係	変身できる子供	物語	460	絵入り童話本	1964 人間
56	真珠の池	詩・抽象的	五七五七七	和歌	300	Polystyrene paper edition	1964 人間
57	河童河太郎	ユーモア・エスプリ	瓜の絵に恋した河童	物語	300	自刻木版可憐判	1964 鬼・妖怪
58	新しい地球	人物・人生批評	男の地球を作る試み	物語	300	Top stereo	1965 人間
59	人魚と嫦娥	人物・人生批評	人の子を産みたい人魚	物語	300	高岡紙螺鈿	1966 鬼・妖怪
60	Leoの魔法	人物・人生批評	魔法を学んだ青年	物語	470	Relief print	1965 人間
61	造物主失踪	社会・反骨精神・アイロニー	造物主による混乱騒動	物語	300	自刻木版可憐判	1965 神
62	侏儒の饗宴	詩・抽象的	第五の世界の宴	詩	300	ローラックス詩書	1966 (空想・神秘・感覚)
63	祈祷の書	社会・反骨精神・アイロニー	多種多様な祈り	詩	470	Sペランの本	1966 神
64	二十世紀の虎	社会・反骨精神・アイロニー	人間になった虎	物語	300	自刻木版可憐判	1966 動物・鳥
65	人生切手	詩・抽象的	人生	詩	300	彫刻凹版	1966 人間
66	さもいや伝	人物・人生批評	蛙の化身と熊狩りの夫	物語	300	印伝	1966 人間
67	風・水・火・星	詩・抽象的	自然と人間	詩	300	Technamation	1966 擬人化(自然)
68	逆立勘九郎	人物・人生批評	逆立ちして見る世界	物語	300	自刻木版可憐判	1967 人間
69	六つの窓	詩・抽象的	人間の六つの感覚	詩	300	Qper本	1967 (空想・神秘・感覚)
70	悪魔の旗	社会・反骨精神・アイロニー	悪魔と神	物語	500	Embossograph mosaic	1967 神

71	湖の人	人物・人生批評	白鳥の息子の獵師	物語	300	Miracle tower	1967	人間
72	KAGEYA	人物・人生批評	影を売る商売	物語	300	文字木口木版	1967	人間
73	鳩と奇術師	ユーモア・エスプリ	奇術師の鳩	物語	300	静电印刷	1967	人間
74	笛を吹く城	人物・人生批評	人間の善意が生む音	物語	300	Sペランのゴブラン織	1968	人間
75	けちな神様	社会・反骨精神・アイロニー	人間に潜り込む神様	物語	300	自刻木版可憐判	1968	神
76	あるくJACK	ユーモア・エスプリ	トランプのJACK	物語	300	現代ガラス絵	1968	人間(トランプ)
77	眼球異聞	社会・反骨精神・アイロニー	見えない心理	物語	500	Rainbow print	1969	人間
78	モスクワの月夜	人物・人生批評	小男と大女の夫婦	物語	300	自刻木版可憐判	1969	人間
79	π子の船出	詩・抽象的	女性の解放と自由獲得	詩	500	Transart	1969	人間
80	迅四郎の窓	人物・人生批評	窓の外の世界を見直す	物語	500	APRステンドグラス	1969	人間
81	世界は渦巻	社会・反骨精神・アイロニー	様々な渦巻き	詩	500	凸版	1969	(空想・神秘・感覚)
82	花園の気流	ユーモア・エスプリ	黒い小鳥の変身	物語	300	植毛印刷	1970	動物・鳥
83	世界革命	社会・反骨精神・アイロニー	革命と理想郷建設	物語	300	自刻木版可憐判	1970	人間
84	平和白書	社会・反骨精神・アイロニー	平和とは何か	物語	500	Thermo Printex	1970	動物・鳥・人間
85	女人禁制	社会・反骨精神・アイロニー	女人禁制の高礼	物語	300	自刻木版可憐判	1971	人間
86	天とは何か	昔話や伝説	天とは何かを考えた男	画文本	300	凸版	1971	人間
87	呂宋お菊	人物・人生批評	菊姫から乙姫に	物語	300	拓摺	1972	人間
88	瓢箪作家	社会・反骨精神・アイロニー	瓢箪作家の善行	物語	500	Coupageの凸版	1972	人間
89	面倒無用党	社会・反骨精神・アイロニー	何もしない方が面倒	物語	300	レリーフ写真版	1972	人間
90	現代の神々	社会・反骨精神・アイロニー	公害で死ぬ神々達	物語	300	伝承木版	1972	神
91	虹を作る男	社会・反骨精神・アイロニー	本を作り人の心に虹を	物語	500	自刻木版可憐判	1973	人間
92	小萩抄	人物・人生批評	小萩の数奇な生涯	物語	300	凸版折本二冊挿入り	1973	人間
93	おかしな象の話	ユーモア・エスプリ	象の牙の音楽とピアノ	物語	300	素描凸版	1973	動物・鳥
94	高杉晋作	人物・人生批評	捨子飼育と間蔵大王	物語	500	多色オフセット	1973	人間
95	造物主御帰還	社会・反骨精神・アイロニー	造物主人類改造計画	物語	300	自刻木版可憐判	1973	神
96	双青の夢	人物・人生批評	鉛売りの有為転変の夢	物語	300	自刻木版可憐判	1974	人間
97	RomとRam	ユーモア・エスプリ	女性と男性の対比	物語	300	皮革印刷	1974	人間
98	金色の森	社会・反骨精神・アイロニー	自然破壊の罰	物語	500	金線印刷	1974	人間
99	どん・きほうて	昔話や伝説	ドン・キホーテ	物語	300	Coupage凸版	1974	既存の伝承等の人物
100	雄鶏ルコック	社会・反骨精神・アイロニー	鶏の英雄ルコック	物語	500	エンボス	1975	動物・鳥
101	小さな雪女	童話	小さい雪女を拾う	物語	300	Snow view	1975	鬼・妖怪
102	狗猿考	ユーモア・エスプリ	猿と犬の混血獣	物語	300	自刻木版可憐判	1975	動物・鳥
103	洗脳奉行	ユーモア・エスプリ	奉行の洗脳と活躍	物語	500	四色凸版	1975	人間
104	天狗天八郎	ユーモア・エスプリ	人に恋した天狗の失恋	物語	300	多色孔版	1975	鬼・妖怪
105	珍和名抄	ユーモア・エスプリ	変な日本語	画文本	300	自刻木版可憐判	1976	もの
106	半介の神様	童話	半介と鶴の神様	物語	300	凸版	1976	動物・鳥
107	アイウエ王物語	ユーモア・エスプリ	あかさたな順	物語	530	凸版オフセット	1976	人間
108	ナイルの葦	人物・人生批評	バビルスの語源の娘	物語	300	バビルス造本	1980	人間
109	王様の馬車と乞食の馬車	人物・人生批評	王様と馬車の話	物語	300	自刻木版可憐判	1976	人間
110	京之介と千草	人物・人生批評	武士と女中の恋愛	物語	300	木版・凸版	1977	人間
111	提灯の詩	社会・反骨精神・アイロニー	提灯に話しかける男	物語	500	ヴィニール造本	1977	もの
112	鼠小僧下呂吉	社会・反骨精神・アイロニー	現代で鼠小僧をする	物語	300	孔版・凸版	1977	人間
113	雷おさん	社会・反骨精神・アイロニー	雷からウーマンリブ	物語	300	自刻木版可憐判	1977	神
114	紺次とお丹	ユーモア・エスプリ	狐と狸の恋愛話	物語	300	Sealing Print	1977	動物・鳥
115	人生の門	社会・反骨精神・アイロニー	自由か統制か	物語	300	凸版可憐判	1978	人間
116	謎蘭の鯉	人物・人生批評	貧乏な少女と錦鯉	物語	300	金箔剪紙	1978	人間
117	ルイとカンナ	ユーモア・エスプリ	研究者二人	物語	560	パフボード版	1978	人間
118	袖の下	人物・人生批評	母の教えを信じる男	物語	300	自刻木版可憐判	1979	人間
119	エリアナ姫と蝶	人物・人生批評	蝶に没頭した姫	物語	300	アルミナ磁器	1979	人間
120	花竜と狸	人物・人生批評	芸妓とベットの狸	物語	300	三色凸版	1979	人間
121	車夫萬五郎	人物・人生批評	車夫の不思議な体験	物語	300	二色凸版	1979	人間
122	珍竹林之命	社会・反骨精神・アイロニー	変な名前の神様	物語	500	二色凸版	1979	神
123	番傘奇譚	人物・人生批評	不思議な傘	物語	300	パフボード版	1979	人間
124	可平と猫	人物・人生批評	猫嫌いの男と猫	物語	300	二色凸版	1979	人間
125	シンの魔法	人物・人生批評	コブラ使いと魔法	物語	300	自刻木版可憐判	1979	人間
126	べら棒物語	ユーモア・エスプリ	べら棒とはどんな棒	物語	300	賦形熱版	1980	人間
127	加藤清正	人物・人生批評	同姓同名の戦時下	物語	580	三色凸版	1980	人間
128	百済の仙人	人物・人生批評	仙人になりたい王族	物語	300	凸版	1981	人間
129	裸女ネサイ	人物・人生批評	闘争終結までの奮闘	物語	300	自刻木版可憐判	1980	人間
130	月から来た子	詩・抽象的	月の不思議な子供	物語	300	凹式金線版	1981	擬人化(自然)
131	千手観音	ユーモア・エスプリ	千手観音になった男	物語	300	笹面仙・墨絵オフセット	1981	神
132	陶工栗衛門の妻	人物・人生批評	陶工の妻の話	物語	500	自刻木版可憐判	1981	人間
133	風神と雷神	社会・反骨精神・アイロニー	風神と雷神の会話	物語	300	蒲葉抄紙本	1982	神
134	赫夜姫後日譚	社会・反骨精神・アイロニー	現代の輝夜姫	物語	600	三色凸版	1982	既存の伝承等の人物
135	釣鐘異聞	ユーモア・エスプリ	お寺の不思議な釣鐘	物語	300	彩雲紙・凸版	1982	もの
136	いそなげき	童話	人魚を見た人の話	物語	300	ALL STAMPING(銀)	1982	人間
137	ABC夜話	人物・人生批評	アルファベット順	画文本	300	自刻木版可憐判	1982	人間
138	鳥遣いの乙女	社会・反骨精神・アイロニー	鳥を生み出す女	物語	500	レーザー光線カット	1983	人間
139	天竺の鳥	人物・人生批評	鳥刺しと鳥	物語	300	印度手漉紙本・2色凸版	1983	人間

(中略)これ[機械的製版]は機械操作や化学処理操作が主となる製版を意味する。

(中略)工芸的表現とは工作によって直接に絵画、意匠などを表現することを意味する。

(中略)新素材とは従来の観念では本の素材と考えられなかった材料や(本文紙として金属箔やポリスチレンなど)、その刊本が制作された時代に初めて新しく開発された材料(SベランやAPRなど)を意味

する。また新技術とは新しく開発された特殊印刷によるもの(静電印刷、植毛印刷など)を意味する。

武井の表現様式は大きく分類すると4つに分けられ、作家の手技的表現によるもの、機械的な製版によるもの、工芸的表現を用いるもの、特殊な素材や技術によるもの

それぞれを表としてまとめ、それを元に考察をしていきたい。

[表2]

No	タイトル	表現様式	手技的製版	機械的製版	工芸的表現	新素材	特殊印刷
No.1	十二支絵本	一色凸版		○			
No.2	雛祭絵本	凸版手彩		○			
No.3	諸国絵馬集	二色凸版		○			
No.4	善悪読本	二色凸版		○			
No.5	童話帳	自刻木版	○				
No.6	畑の豆本	スクラッチ版	○				
No.7	本朝昔話	合羽版	○				
No.8	十二時之書	石版		○			
No.9	伊曾保の絵本	アップリケ原色版		○			
No.10	風村三代記	伝承木版	○				
No.11	燈	自刻木版	○				
No.12	KOKESHI	伝承木版	○				
No.13	僕の歌留多	自刻木版	○				
No.14	お猫様	活版・木版	○				
No.15	牡丹妖記	木版木拓	○				
No.16	のえる之書	糊染			○		
No.17	乞食の本	自刻木版	○				
No.18	聖AGNES之書	木口木版	○				
No.19	もりどんの話	自刻木版	○				
No.20	あいそぼすふあぶら	vari-type木版	○				
No.21	菊妖記	レリーフ拓摺	○				
No.22	紗間の符	糸版	○				
No.23	天空の花	陶版	○				
No.24	ARIA	層版紙拓	○				
No.25	折鶴物語	瓦版	○				
No.26	胡蝶散策	三色凸版		○			
No.27	姫の尺牘	友禅染			○		
No.28	雲長異聞	Woven Lavel			○		
No.29	第五の世界	ベンジュラム・グラビア		○			
No.30	誕生譚	エッチング	○				
No.31	木魂の伝記	寄せ木			○		
No.32	極秘探訪	セロスライド			○		
No.33	六之助行状	鏤孔版	○				
No.34	雪の讃頌	Tandem print				○	
No.35	近くの世界	原色版		○			
No.36	太陽と孔雀	顔彩金工			○		
No.37	えでんの異変	コロタイプ		○			
No.38	Sphere	特殊網写真版		○			
No.39	かなりやABC	グランド孔版	○				
No.40	おぼけ退場	カラーグラビア		○			
No.41	ストロ王	Straw mosaic			○		
No.42	Q子の奇跡	ドライポイント電鍍			○		
No.43	七重と八重	彫紙			○		
No.44	四十四番館	絵入り物語本	○				
No.45	林檎と人間	石膏版	○				
No.46	神々の旗	アルミ詩集				○	
No.47	運の悪い男	木版乾拓	○				
No.48	宇宙裁縫師	伝承西洋木版	○				
No.49	HAREM	アップリケ			○		
No.50	独楽が来た	伝承木版	○				
No.51	天国と地獄	自刻木版可償判	○				
No.52	卵から卵	木綿型染			○		
No.53	鬼の郷衛門	Wonder View				○	
No.54	紫の眼鏡	自刻木版可償判	○				
No.55	ラムラム王	絵入り童話本		○			
No.56	真珠の池	Polystyrenepaper edition				○	
No.57	河童河太郎	自刻木版可償判	○				
No.58	新しい地球	Top stereo				○	
No.59	人魚と蝶嬢	高岡紙螺鈿			○		
No.60	Leoの魔法	Relief print					○
No.61	造物主失踪	自刻木版可償判	○				
No.62	侏儒の饗宴	ローラックス詩書				○	
No.63	折鶴の書	Sベランの本				○	
No.64	二十世紀の虎	自刻木版可償判	○				
No.65	人生切手	彫刻凹版	○				
No.66	さいみや伝	印伝			○		
No.67	風・水・火・星	Technamation				○	
No.68	逆立勘九郎	自刻木版可償判	○				
No.69	六つの窓	Qper本				○	
No.70	悪魔の旗	Embossograph mosaic					○

No.71	湖の人	Miracle tower					○
No.72	KAGEYA	文字木口木版		○			
No.73	鳩と奇術師	静電印刷					○
No.74	雷を吹く城	Sベランのゴブラン織				○	
No.75	けちな神様	自刻木版可償判	○				
No.76	あるくJACK	現代ガラス絵					○
No.77	眼珠異聞	Rainbow print					○
No.78	モスクワの月夜	自刻木版可償判	○				
No.79	r子の船出	Transart					○
No.80	迅四郎の窓	APRステンドグラス					○
No.81	世界は渦巻	凸版			○		
No.82	花園の気流	植毛印刷					○
No.83	世界革命	自刻木版可償判	○				
No.84	平和白書	Thermo Printex					○
No.85	女人禁制	自刻木版可償判	○				
No.86	天とは何か	凸版			○		
No.87	呂宋お菊	拓摺	○				
No.88	韻師作家	Coupageの凸版			○		
No.89	面倒無用党	レリーフ写真版			○		
No.90	現代の神々	伝承木版	○				
No.91	虹を作る男	自刻木版可償判	○				
No.92	小秋抄	凸版折本二冊挟入り			○		
No.93	おかしな象の話	素描凸版			○		
No.94	高杉晋作	多色オフセット			○		
No.95	造物主御帰還	自刻木版可償判	○				
No.96	双青の夢	自刻木版可償判	○				
No.97	RomとRam	皮革印刷					○
No.98	金色の森	金線印刷			○		
No.99	どん・きぼうて	Coupage凸版			○		
No.100	雄鶏ルコック	エンボス				○	
No.101	小さな雪女	Snow view					○
No.102	洗髪考	自刻木版可償判	○				
No.103	洗脳奉行	四色凸版			○		
No.104	天狗天八郎	多色孔版	○				
No.105	珍和名抄	自刻木版可償判	○				
No.106	半介の神様	凸版			○		
No.107	アイウエ王物語	凸版オフセット			○		
No.108	ナイルの葦	パピルス造本					○
No.109	王様の馬車と乞食の馬車	自刻木版可償判	○				
No.110	京之介と千草	木版・凸版			○		
No.111	提灯の詩	ヴィーベル造本					○
No.112	鼠小僧下呂吉	孔版・凸版	○				
No.113	雷おさん	自刻木版可償判	○				
No.114	紺次とお丹	Sealing Print					○
No.115	人生の門	凸版可償判			○		
No.116	護国の子	金箔剪紙				○	
No.117	ルイとカンナ	バフボード版	○				
No.118	袖の下	自刻木版可償判	○				
No.119	エリアナ姫と蝶	アルミナ磁器					○
No.120	花巻と狸	三色凸版			○		
No.121	車夫萬五郎	二色凸版			○		
No.122	珍竹林之命	二色凸版			○		
No.123	番傘奇譚	バフボード版	○				
No.124	可平と猫	二色凸版			○		
No.125	シンの魔法	自刻木版可償判	○				
No.126	べら棒物語	紙形熱版					○
No.127	加藤清正	三色凸版			○		
No.128	百済の仙人	凸版			○		
No.129	裸女ネサイ	自刻木版可償判	○				
No.130	月から来た子	凹式金線版			○		
No.131	千手観音	管画仙・黒鉛オフセット					○
No.132	陶工葉門の妻	自刻木版可償判	○				
No.133	風神と雷神	蒲葉抄紙本					○
No.134	赫夜姫後日譚	三色凸版			○		
No.135	約鐘異聞	彩雲紙・凸版					○
No.136	いそなげき	ALL STAMPING(銀)					○
No.137	ABC夜話	自刻木版可償判	○				
No.138	鳥遣いの乙女	レーザー光線カット					○
No.139	天竺の鳥	印度手漉紙本・2色凸版					○

4-3. 具体的な刊本作品の例

手技的製版

《畑の豆本 (No.6)》(1940年)

技法はスクラッチ版、本の仕様は和綴本、サイズは14.3×11.2cm、部数は300、彫りは武井武雄、摺りは大橋光吉である。スクラッチ版とは透明なセルロイド版の上に不透明な薬品を塗り、裏面から露光し直接彫っていく技法である。原版を金属に焼き付け、その後平版印刷を行う一流主義の性格を出し始めるNo.4から3作品目である。また、各冊別版式の表現様式を企画し始めたNo.5から2作品目となり、最初期の武井の刊本作品となる。戦時中にセルロイドが使えなくなったことと、発案者の加藤が亡くなったことで、武井しか知らない方法となっている。刷り上がりはエッチングのようだが制作過程はそれよりも簡単のように思える。奇抜な印刷方法を試す例としてはこれが一冊目になる。

《あいそぼす・ふあぶら (No.20)》(1952年)

技法はVari-type、本の仕様は細工表紙、サイズは14.6×11.3cm、部数は260、彫りは武井武雄、摺りは平井孝一である。Vari-typeは武井独自の印刷技法であり、平らな所に絵の具を置き、その上に摺り用紙、そして紙や縄で作った版をさらに乗せる。圧力差で色の濃さに変化を出す仕組みになっている。この技法は刊本のみならず版画作品で幾度となく使用されている技法であり、武井本人の著書『本とその周辺』(中央公論社、1975年)によれば、「Vari」とはvariation、variety、variableから来ている。協力してくれた名工、平井だからこそ再現できた摺りの技法である。

《ルイとカンナ (No.117)》(1978年)

技法はパフボード版、本の仕様はめおと函付、サイズは14.5×13cm、部数は560、彫りは武井武雄、摺りは荒木行雄、製本は矢嶋三朗、製函は鈴木三好である。パフボード版とは緩衝材などで使われる発泡ポリウレタンフォームを版として扱う技法である。この技法はこの翌年《番傘奇譚 (No.123)》でも用いられているが、この刊本では、素材の特色を生かせなかったという不満があったらしく、リベンジを試みている。水をはじくため、油性インクを使う。柔らかい素材であり、カーボン紙や鉛筆で下図を書いただけで版面に跡が残るため、鉄筆と刀で直接書き込む工夫が必要になる。

機械的製版

《十二時之書 (No.8)》(1942年)

技法は石版、本の仕様は和綴本、サイズは15×10.7cm、部数は300、摺りは小柴錦侍である。当時数少ない石版を扱っている会社であった小柴印刷所の協力のおかげもあって実現した。地色の鼠色も印刷で刷られており、白色は抜きで表現している。仕組みとしては原画を撮影し、石版に伏せて製版するという単純なものである。初期の作品であるためか特殊な工夫は見られない。題材として描かれている時計は上野の科学博物館のものである。

《月から来た子 (No.130)》(1981年)

技法は凹式金線版、本の仕様はめおと函付、サイズは14.2×12.5cm、部数は300、摺りは荒木行雄、製本は矢嶋三朗、製函は鈴木三好である。《金色の森 (No.98)》と同じ印刷方法を使用している。金色のインクを背面にし、紺のインクを前面に刷る。凹版のため、凹の部分が金線のように見えるという技法になっている。金箔を使うよりも簡単で時間もかからないため、複数印刷するための工夫とも言える。刊本作品の制作過程は表現様式を決めてから物語を考えるがこの場合は、逆になっているらしい。

工芸的表現

《木魂の伝記 (No.31)》(1957年)

技法は寄せ木、本の仕様は帙付、サイズは14.6×11.3cm、部数は300、職人は一ノ瀬鶴之助である。寄せ木細工は、異なる色と種類の木材を組み合わせて美しい模様を作り出す伝統的な技法で、自然な木の風合いを生かしながら、高度な職人技術が活かされる。主要な工程には、木材パーツから種板を作成し、それを非常に薄く削る「ズク貼り」や、種板を削り出して作品にする「ムク作り」があり、この刊本作品では「ズク貼り」の技術を扱っている。箱根の寄木細工を調査に行った際に、本のしおりのようなものも販売されていたため、その薄さから紙との相性はいいと考えられる。なお寄せ木細工の職人を探し当てるのに3年かかっており、この刊本作品を担当した職人、一ノ瀬鶴之助氏は小田原箱根の職人の中でも長老とされる名工である。

《ストロウ王 (No.41)》(1960年)

技法はStraw mosaic、本の仕様は布装・めおと函付、サイズは14.5×11.3cm、部数は300である。これは寄せ木細工と同じく土産物に散見される日本の

伝統工芸である。麦藁細工という名で知られている。剃刀で藁を切って下絵に貼り付けていくという地道な作業で、色のついた表現をするには、染料を吸った藁を使う。これらは城崎温泉の近辺でかろうじて職人が存在しているが、当時でもすでに仕事として成り立たないほど廃れている工芸であったらしい。光沢の輝きが美しく特徴的である。

新素材

《迅四郎の窓 (No.80)》(1958年)

技法はAPR ステンドグラス、本の仕様はめもと函付、サイズは17.3×14.6cm、部数は500である。旭化成の当時の開発途上の素材で会ったAPRを使用したステンドグラス風の作品。APRは光照射によって硬化する素材であり、当時外部で使用不可の貴重な素材であった。しかし、当時の担当者が過去の作品に感激して、この刊本制作に協力してもらえたこととなった。

《ナイルの葦 (No.108)》(1980年)

技法はPresse Papyrus、本の仕様はめもと函付、サイズは14.5×11.4cm、部数は300である。このパピルス作成は高山での栽培からはじめ、昔と同じ製法で3か月かけて作られている。パピルスを使う事を目的として作られたためモチーフはエジプトである。

特殊印刷

《鳩と奇術師 (No.73)》(1967年)

技法は静電印刷、本の仕様はめもと函付、サイズは17.7×13.7cm、部数は300である。静電気印刷は、静電気のプラスとマイナスがくっつく静電気的作用を利用する印刷方式である。当時では最新の技術であり、刊本作品に積極的に取り入れている。被印刷物と版が接触せず、その間に被印刷物に反対の電荷を帯びた絵具が付着するため、表面に凹凸を持つ物にも印刷できるのが特徴になっている。この刊本ではその特性を生かし、表面がざらついた素材に挿絵を付けている。

《花園の気流 (No.82)》(1970年)

技法は植毛印刷、本の仕様はめもと函付、サイズは17.3×12.2cm、部数は300である。静電印刷と同じく、当時では最新技術で会った印刷方式である。現在ではフロッキープリントと呼ばれ、フェルト状の毛をシルクスクリーンの特殊な糊で定着させる技

術であり、刊本内の描写の一部に用いている。この印刷方式は現在の絵本でも見られる。

「鳥の連作」シリーズをはじめ、版画制作において、武井は鳥というモチーフをよく用いていた。彼にとって鳥のモチーフが生涯で特別な意味をもっていたか、このモチーフが刊本でどのようにあらわれているかについて、版画作品などとも比較しながら次節で検討したい。



【図2】《鳥の連作No.4》1967

5. 鳥のモチーフが登場する刊本についての分析、他の鳥のモチーフの作品との関係・比較も含めて

2022年6月13日に刊本作品内の描写表現を調べるために刊本数冊の調査を行った。

この表も撮影した計35冊のうち18冊を、実地調査に基づいて筆者が独自に作成したものである。《十二支絵本》、《童語帳》、《十二時の書》、《伊曾保の絵本》、《あいそぼすふあぶら》、《折鶴物語》、《太陽と孔雀》、《かなりやABC》、《卵から卵》、《紫の眼鏡》、《ラムラム王》、《湖の人》、《鳩と奇術師》、《花園の気流》、《雄鶏ルコック》、《半介の神様》、《鳥遣いの乙女》、《天竺の鳥》は、139冊の刊本の中で明確に鳥が登場しているため、その描写を調査の対象とした。【表3】はそれらの鳥のモチーフとする刊本を表としてまとめたものである。No.と年代から見るに一時期に固まっているモチーフというわけではなく、刊本作品を始めてから、あくまでよく見られるモチーフなのだと考えられる。

撮影した写真はおよそ100近くにわたり、鳥の

種類は、鶏、鶯、鶴、孔雀、金糸雀、鶺鴒、白鳥、鳩、雉、鶇、鴉が確認された。これらのことから意図したものではないと仮定しても、鳥を刊本のモチーフにしている割合は高いと感じられた。



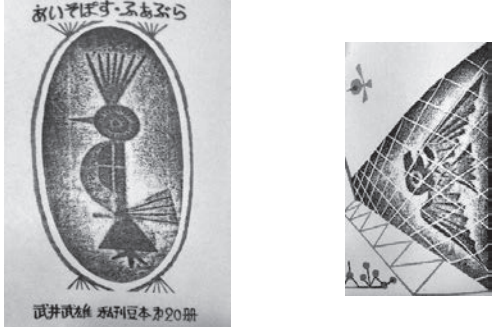



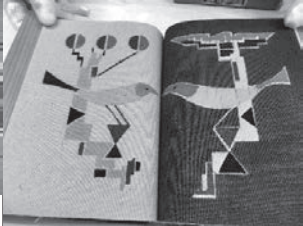











主に童画作品の鳥のモチーフ、デザインの流用が多いように感じられる。これらに関しては改めて別稿で詳しく調べる予定とし、現状把握できている鳥のモチーフの画像を貼っておく。

【表3】

No.	タイトル	鳥	テーマ	形式	技法	年代
1	十二支絵本	ニワトリ	干支	短文集	一色凸版	1935
5	童語帳	うぐいす	子どもの発想	短文集	自刻木版	1939
8	十二時之書	ニワトリ	時間	短文集	石版	1942
9	伊曾保の絵本	鳩・鷹	米英と童話	短文集	アップリケ原色版	1943
20	あいそぼすふあぶら	鳩・鷹	イソップ寓話	短文集 物語	vari-type	1952
25	折鶴物語	折鶴	中納言と鶴	物語	瓦版	1955
36	太陽と孔雀	孔雀	太陽と植物と子供	詩	蝕彩金工	1959
39	かなりやABC	かなりや	鳥で英語の解説	絵のみ	グランド孔版	1959
52	卵から卵	架空	卵から卵に戻る	絵のみ	木綿型染	1963
54	紫の眼鏡	架空	不思議な眼鏡	物語	自刻木版可憐判	1963
55	ラムラム王	鶺鴒	変身できる子供	物語	絵入り童話本	1964
71	湖の人	白鳥	白鳥の父を探す狩人	物語	miracle tower	1967
73	鳩と奇術師	鳩	奇術師の鳩	物語 短文	静電印刷	1967
82	花園の気流	架空	黒い小鳥の変身	物語	植毛印刷	1970
100	雄鶏ルッコク	ニワトリ	鶏の英雄ルッコク	物語	エンボス	1975
106	半介の神様	ニワトリ	半介と鶏の神様	物語	凸版	1976
138	鳥遣いの乙女	架空	鳥を生み出す女	物語	raser光線cut	1983
139	天竺の鳥	架空	鳥刺しと鳥	物語	印度産手漉紙本文 凸版二色摺	1983

【表4】

<p>No.1 十二支絵本</p> 	<p>No.3 諸国絵馬集</p> 	<p>No.4 善悪読本</p> 	<p>No.5 童語帳</p> 
<p>No.6 畑の豆本</p> 	<p>No.7 本朝昔話</p> 	<p>No.8 十二時之書</p> 	

<p>No.9 伊曾保の絵本</p> 	<p>No.15 牡丹妖記</p> 	<p>No.20 あいそぼすふあぶら</p> 	
<p>No.36 太陽と孔雀</p> 	<p>No.38 Sphere</p> 	<p>No.39 かなりや ABC</p> 	<p>No.52 卵から卵</p> 
<p>No.53 鬼の郷衛門</p> 	<p>No.54 紫の眼鏡</p> 	<p>No.55 ラムラム王</p> 	<p>No.71 湖の人</p> 
<p>No.73 鳩と奇術師</p> 	<p>No.79 π子の船出</p> 	<p>No.82 花園の気流</p> 	<p>No.100 雄鶏ルコック</p> 
<p>No.106 半介の神様</p> 	<p>No.138 鳥遣いの乙女</p> 	<p>No.139 天竺の鳥</p> 	

6. おわりに なぜ武井は刊本を制作したのか

武井武雄という芸術家は、その多彩な経歴と独特の芸術的ビジョンによって際立つ存在である。彼は一般的な絵描きとは異なり、職業やデザイン分野で絵を制作し、初期の挿絵等は特にデザイナー竹久夢二の影響を受けていた。そのため、武井の作品にはデザイン要素も見られ、竹久夢二のスタイルにも影響を受けている可能性が高い。

武井の性格は真面目で凝り性であり、彼の制作活動における情熱と完全主義的なアプローチを支えていた。上でも書かれているように、彼の刊本作品制作に至るきっかけは、日本橋三越で開催された八回ものイルフ・トイス展が打切りとなったことから始まる。この転機により、武井はテーマを毎回変える方向に転換し、展覧会「動物の展覧会」の一環として刊本《十二支絵本》を制作することになる。彼は作品を通じて人々を楽しませることを忘れず、そのユーモアある性格が作品に反映されている。ここから始まる長期の制作は、結果としてライフワークと呼ぶにふさわしいものになった。

刊本作品は武井の制作の軸となる「子供のための作品」ではない。増してや仕事でもない。しかしながら武井が生涯にわたって刊本作品に情熱を傾けた理由は、主に3つになる。作品に対する深い愛情と芸術への情熱、そしてモチベーションの維持である。

刊本作品は仕事ではなく、彼の独自の視点、感性、技術、そして物語が詰まった美術の一環であり、彼の創造的な精神の表現である。そのために彼は時間とエネルギーを惜しまなかった。また、下絵から物語、印刷形式、版画技法、素材、装丁や装本のデザインまで、ほぼ全てを一人で手がけた。この完全主義的なアプローチは、《地上の祭》を経て、模索し始めた「本の美術」という考え方であり、本を視覚的な芸術の表現手段として捉え、広める事を目的としていた。そしてまた、視野と経験の蓄積により、自身の創作活動に良い影響を与えると考えていたのではないかと筆者は推測する。刊本作品の制作を常に続けることで自身の世界観や感覚をより磨きあげていくことを期待したのだろう。働いている人間は老けないという考え方のように、若い感覚を保ちつつ新しいものを取り入れる柔軟性を養う刊本制作は武井武雄の創作人生においてなくてはならないものだったのではないかと考察する。

武井武雄のライフワークである刊本作品は、彼の芸術的な遺産として高く評価されている。彼の作品は美術の領域において独自の地位を築き、多くの人々に感銘を与えた。この刊本制作を通して武井武雄は新たに独自の芸術家としての路線を築き上げた。

註

¹ 武井の版画制作の極致とも言えるほど、こだわり抜かれた作品であり、アオイ書房の志茂太郎氏と、摺りを担当する版画家関野純一郎(1914-1988)の協力を得て、3年半の年月をかけて作られている。

² 1942年にアオイ書房十周年記念で企画された書窓版画帳十連聚の一つ。この企画には当時同じく版画家として活躍していた恩地孝四郎や川上澄生等も参加している。古代から宇宙はどのように認識されていたのかを、世界の例を10説選び出しエッチングで制作。解説文と共に載せられている。

³ この場合における画文本形式というのは、見開きだけで完結しているもので、一頁毎に絵に合った文章が付いてくる形式を便宜上そう呼んでいる。